令和６年度

米原市社会教育委員
提言書

～米原らしさがいきる学びの場～

令和７年３月 21 日

1　はじめに

令和５・６年度の研究テーマを選定するにあたり、委員からは多くの提案がありました。

（提案されたテーマ）

・「市民参加の促進と市民－行政の協働を考える」
・「古民家の活用」
・「図書館を考える」
・「地域共生の学びの場について」
・「過去の提言の今」

提案された内容の多くが地域や学校、人とのつながりを含む居場所と学びにかかわる「学びの場」に関することであることに着目し、提案されたテーマそれぞれが研究に値する内容であることから、包括的なテーマとして「米原らしさが生きる学びの場」を主題に据え、委員それぞれが思う「学びの場」を調査、研究し社会教育委員会議で報告を行うことを活動方針と定めました。

委員各々が「学びの場」の実態を調査し報告することで、今まで見えにくかった「学びの場」を市民にわかりやすく示し、「学びたい人」と「学びの場」のマッチングを推進することを目的に活動を始めました。

調査や会議を行ううちに「学びの場」の現状と課題が明らかになったことから、社会教育委員として、米原市の社会教育をさらに発展させることを目的として、３項目の提言を行うこととしました。

２　社会教育委員活動報告

本提言書の作成にあたって、令和５年度から２年間に渡り、以下の活動を行いました。

令和５年度

・第１回社会教育委員会議　　令和５年６月７日（水）
・第２回社会教育委員会議　　令和５年９月 29 日（金）
・米原市×愛荘町意見交換会　令和５年８月 25 日（金）
・第３回社会教育委員会議　　令和６年３月１日（金）

令和６年度

・学びの場調査研究　　令和６年４月～令和７年３月
・第１回社会教育委員会議　　令和６年８月 28 日（水）
・第２回社会教育委員会議　　令和７年１月 22 日（水）
・第３回社会教育委員会議　　令和７年３月 10 日（月）
・提言書手交式　　令和７年３月 21 日（金）

この活動のほかにも、滋賀県や近畿地区の各種研究大会および研修会に参加し、様々な地域の取組や課題に関する情報を収集しました。

これらの活動を基に、本市の現状を整理し、社会教育委員会議で検討し、内容をまとめました。

【近畿地区社会教育研究大会】
令和５年９月８日（金）［於：滋賀県］
令和６年９月６日（金）［於：京都府］

【愛荘町との意見交換会】
令和５年８月 25 日（金）

３　調査研究活動報告

（１）委員の調査研究報告

委員が思う「学びの場」について、調査研究・フィールドワークを行い、実態を調査することで、現状の把握および課題の発見を行いました。

【地域の伝統行事の後世への継承】

○活動内容

春照地区の八幡神社では、伊吹山の水神へのお礼の踊りとして、５年に１度、太鼓踊りが執り行われており、今回、事前練習の様子を視察しました。

練習では、子どもから大人まで多くの老若男女が参加し、練習の段階でも素晴らしい迫力でした。

５年に１度の開催ながら、長い間その伝統を守り続けておられますが、その後の聞き取り調査では、大きく３つの課題があることがわかりました。

○課題①

まず、少子高齢化に伴う人員不足です。特に子どもの数が少なくなっており、踊りで担当する役割の年齢要件を緩和するなど、開催に工夫を凝らされています。

次に、活動維持のための資金不足です。米原市から実施にかかる補助金が交付されていますが、事業費総額に対して金額が定額となっており、苦慮されています。そんな中、子どもたちは夜間や休日にも頑張って練習に参加してくれているため、何かお楽しみを作ってあげたいという思いを持っておられます。

最後に、活動内容の認知不足です。米原市の文化財として冊子等で紹介されていますが、春照地区だけに活動がとどめられていることもあり、広く認知されていない状況です。

参加者や事業資金の確保、活動周知の取組が有効・必要であると考えます。

【趣味活動、サークル活動の視察】

○活動内容

市内の社会教育施設や体育施設で活動する団体やサークルを取材しました。

それぞれの団体が、目標を持って継続的に、和気あいあいと趣味活動や運動不足の解消に取り組んでおられ、市民の学びの場が開かれていると感じます。

また、それぞれの団体の取組内容は違いますが、団体内で工夫し、折り合いをつけながら活動しておられ、努力が感じられます。

（取材を行った団体）：よし笛サークル、ビーチバレーサークル、太極拳同好会、生け花教室、体操教室、演劇サークル、和太鼓サークル

○課題②

物品や小道具の運搬などの物理的課題、講師の確保や活動の広報などの人的課題がありますが、上記の太鼓踊りと同様に、既存の参加者が減少していることや新規参加者がいないことが課題として挙げられます。団体によっては、出前活動による啓発を行い、老若男女や初心者の参加を歓迎しておられますが、なかなか仲間が集まらない状況です。

また、団体によっては、高齢化が進み、内容もマンネリ化していることから、子どもや若者との交流を広げ、多世代交流を行うことによる盛り上がりが必要であると考えます。

また、活動を見学に行くだけで、皆さんとても喜んでくださいました。団体を直接応援に行ける機会があると良いと考えます。

こうした現場取材から見えてきたことを整理すると、活動を紹介する場があまりないことに加え、各団体の活動内容それぞれに様々な課題があるため、悩みや資金面の課題を相談できる場があると良いと感じました。

【各種ボランティア活動、役員活動への参加】

○活動内容

学校ボランティアや交通安全協会へ参加し、自治会の役員や米原市の各種委員会委員に就任しました。

また、新たな知見の発見や個人の能力の開花、仲間との協働を目的に、市が開講する市民大学である「ルッチまちづくり大学」に入学しました。

○課題③

ボランティア活動や役員活動については、少子高齢化や会員数の減少などによる人材不足で対応に苦慮しています。いかに自分の地域に愛着を持ってもらえるか、ボランティア精神を育んでいけるかが課題となります。

また、同じことの繰り返しによる活動へのモチベーションの低下や、やりがいが感じられないことも課題となります。

現在、地域で活躍している、頑張って活動している方を認め、応援する環境や風土の整備、モチベーションを上げる取組が必要であると考えます。

【民間と行政の協働】

○活動内容

民間と行政の協働という観点から、福井市で取り組まれている市民大学である「ふくまち大学」の活動を調査するため、「ふくい学都祭」（１年間の学びの活動を振り返るイベント）に参加しました。行政と民間が一体となり進めている「ふくまち大学運営委員会」が市民の得意分野や好きなことをテーマに授業やサークル活動を企画し、誰もが「せんせい」になれる仕組みを展開しています。

また、行政から提示された地域課題に市民グループが調査研究を行う「ふくまちラボ」の活動にも取り組まれています。

行政・市民・企業など様々な主体が混ざり合うことで、多様な視点から課題を見て、取組方法を考え、解決へと導く「学び」のスタイルが確立しています。

○課題④

行政、市民、企業など様々な主体が混ざり合うことが重要であり、学びの場に集まった人たちが、互いに対話する中で、それぞれの得意なことや好きなことを伸ばす必要があります。

米原市においても、ふくまち大学のような機能を果たせる仕組みは多くあり、既存のものでは、ルッチまちづくり大学やつくる未来展などが挙げられます。

「学び」を深めていくためには、課題をオープンに語り合う場や活動を紹介できる場が必要であると考えます。

（２）社会教育委員からの提言

以上の調査研究報告を踏まえ、「米原らしさがいきる学びの場」推進のために３項目の提言を行います。

①「学びの場」活動団体の紹介の場をつくる　（課題①、②、④）

〇認知されていない活動団体を中心とした広報戦略

・市民全体を対象とした活動を何でも発表できるような笑顔で集える発表会の開催
・市立図書館（シビックプライドコーナー）や学びあいステーション等での活動内容の展示、紹介
・米原市公式ホームページや広報誌等での活動団体の紹介
・既存の取組やまちづくり事業との連携による周知

⇩

・活動を紹介する場を提供することにより、団体の知名度アップにつながります。
・広く活動の周知を行うことにより、参加者やメンバーの増加が見込めます。

②活動団体の支援　（課題①、②）

・悩みや課題を相談できる相談窓口の設置（明確化）
・活動資金支援制度（クラウドファンディング等）の新設・拡充を図る。

⇩

・相談窓口の設置により、課題解決や同じ悩みを持つ仲間とのネットワーク構築につながります。
・支援制度により、活動が持続的になり、さらには新たな参加者、新たな取組の実施につながります。

③活動者のモチベーション維持　（課題③）

・ボランティア表彰制度の新設（表彰者の紹介や広報を含む）

⇩

・表彰制度により、活動者の自己肯定感の向上、やりがいのアップにつながります。

4　おわりに

「学びの場」は、自らの生きがいとなったり、知見を広げて自らを高めたりする際にはもちろん、新たな人間関係や人と人とのつながりをつくる上で非常に有用です。

学校や図書館、学童保育、学びあいステーション、ルッチまちづくり大学など、講義を受けたり、文献を読んだりして自己の知見を広げる既存のものだけではなく、市役所の市民交流スペースや米原駅前広場など様々な人が集まり、つながりが生まれる場所や、今回の調査研究で発見した各種団体やサークル、子ども食堂、地域で新たに立ち上げられた居場所（例：柏 LABO、長岡駅前カフェ・ルミエ等）など、それぞれが目的を持ち、仲間をつくり、生き生きと活動されている場所も「学びの場」であると考えます。

超高齢化社会での人口減少による役員の成り手不足や参加者数の減少により、様々な「学びの場」の存続が危惧される中で、活動のＰＲや支援を行っていくことはもちろん、地域の中で自らの役割や知識、技能が必要とされ、社会のくらしに役立っているという実感を得て、生きがい感や自己効力感を高めてもらうような取組を実践することが、行政や社会教育委員に求められている役割の一つであると感じます。

最後に、今後の社会教育・生涯学習がより良いものとなるよう、社会教育委員が調査研究したこの提言書をぜひ活用いただきたいと思います。

米原市社会教育委員名簿

（任期：令和５年４月１日から令和７年３月 31 日）

役職	氏名	備考
委員長	大谷　章	社会教育関係者
副委員長	上田　洋平	学識経験者
委員	谷口　嘉之	社会教育関係者
委員	北澤　あさこ	社会教育関係者
委員	川﨑　武和	社会教育関係者
委員	日置　耕一	社会教育関係者
委員	河地　誠	学校教育関係者
委員	角川　将司	学校教育関係者
委員	谷口　絹代	家庭教育関係者
委員	冨田　正子	家庭教育関係者
委員	福永　ひろみ	公募委員
委員	布施　広美	公募委員

敬称略・順不同